



コルネリオ会

(キリスト者自衛隊員の会)

ニュースレター 1636

1983年2月

✿聖書は無誤か(その1)

私がキリストの救いを受けてクリスチャンになった頃、ある日M宣教師が私に質問して「あなたは聖書の一言一句誤りがないと信じますか」と言われた。私はその時言下に「聖書の記述に全く誤りがないとは信じられません」と答えた。するとM師は「救われた立派なクリスチャンの中にも聖書の一言一句を真理だと信ずる人と、信じない人とがおります」ということであった。それから二十有余年その事についてはあまり深く考える機会がなかったが、近年になっていわゆる福音派と言われる人達の中にも完全な無誤性についての論議が出て来たようである。この事は信仰の面から見てかなり根本的な問題なので検討してみたい。若し我々の認識を地上のレベルに戻して、人間の基準で聖書を読むならばあそこにもここにも納得のいかない部分が出て来て素直に読む事が出来なくなる。しかし我々は日頃聖書を「神のことば」として読んでいたので我々の思想以上の事柄が出て来ても、その一つ一つを不思議に思ったりしないでそのまま素直に受入れることが出来る。

即ち信仰に関する事柄および聖書に導びかれる生活の面については聖書の主張をそのまま信じてクリスチャンとしての毎日の行動を律しているわけである。しかし更に聖書の記述の端々に目を通して見回す時、科学的な問題や歴史的な記述、つまり地上の事柄に具体的に関連する部分については現実の状態と照らし合せる時その違いが目について簡単に信じられないという事らしい。

そこでここでは科学的な記述例へば聖書にある奇跡について考えてみたい。普通地上では起こらないような事を奇跡と称し、普通の自然法則に従わない事を超自然という風と呼んでいるが、我々が普通に自然現象と呼んでいるのは多く繰り返しのきく事柄について言っているわけで、この点を現在の確率統計の考え方によって検討してみよう。

今砲で或る目標に向って射撃をする場合に射弾の散布は普通ガウス分布に従うといわれる。

即ち例へば 100 発の弾丸を的に向って射撃すればこれらは全部中心の黒丸に命中するのではなく、黒丸には 50 発そして残りは黒丸を中心とした多くの同心円の中に散布する。そして一部の弾丸は中心からかなり離れた同心円にも当る。そして射弾の数が多くなれば外の同心円に当るものの数も増し、かなり離れた所に当る確率も 0 ではなくなる。即ち自然現象は種々の条件が重なり合うので非常に複雑であり単純な理論で計算されるようなきまった点に集中するというものではない。即ち始めの予想とは相当違った結果が得られる事もあり、しかもこれは決して誤ってそうなるのではなく、そうなるべくしてなるわけである。かなり前に初期のロケット弾の射撃実験を富士の裾野で実施した事があったが、その時発射したある一弾が射方向とは反対の方向に飛んでしまった事があった。これは勿論実験者としては失敗で、その事故原因の探求に苦勞した事があった。しかしこれも原因があったから、その予想とは反対の方向に飛んだので自然現象としては少しも不思議ではなく、飛ぶべくして飛んだので只その原因が不明であったわけである。普通に超自然現象と呼ばれる事柄も自然の創造者である神の目から見たら少しも超自然ではないのかも知れない。只我々が人間の学問である自然科学の目を基準にして見る時、そのような事柄は到底説明することが出来ず自然科学の分野からは除外せざるを得ないわけであろう。聖書に出て来る超自然的奇跡を否定又は肯定出来る程人間の自然科学が発達する事を望み願う事は人間にとって無理からぬ事かも知れないが、しかし聖書の記述から見て主なる神がそれをお許しになるとは考えられない。

次によく言われる事に聖書は信仰の大すじに於て無誤であるが文法的な誤り等

の可能性があるという事である。しかしこれについても次の事が言えるのではなからうか。即ち聖書はその当時の人間が使用していた言葉で書かれているのであり、その言葉について当時の人は意志疎通のための約束ごととして文法を持ち、それによって言葉を用いて来た。しかし之は人間の約束であるので人間の考え以上の考えを伝えようと思えばこの文法では不十分であろう。主なる神が人に啓示を与えられる場合どうしてこの制約された人間の文法の中にとじ込められなければならないのであろうか。神が超文法によって啓示を与えられた時人は平易にそれを理解する事が出来なくても聖霊の助けによって神の意を受取る事が出来るのではなからうか。

我々が聖書を信ずるのはその内容を人間の知識で解明出来たからではない。それが神のことばであるならば、たとえ完全に理解出来ない所があってもそのすべてを無誤として信ずる事が一番わずらわしさのない明快な方法であり主なる神もそれを良しとされているのかも知れない。

「聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である」(Ⅱ テモテ 3 : 16)

✿ キリスト者自衛官の悩み

藤原 正明(元陸1佐)

1. 今井先生の「平和の道」(ニューズレター№33)「国家防衛論」I,II(№34,35)を、興味深く読まさせていただきました。防衛にたずさわるクリスチャンとして、科学者として、又海外の人々との広い交りを通して呈示された防衛論は、斬新で、祈りと指唆に富んだ提案だと思えます。特に、核戦争の惨害を Simulate して公開する案は、核戦力の把握、Simulate の内容等について論議はあるにしても、実行されれば、世界に一大核戦争防止運動が盛上がることが予想され、人類の平和のため大きな威力を発揮するのではないかと期待されます。
2. 「力による平和を排して福音による真の平和を」というのが私達の切なる願いであり、祈りでもありますが、Dunlap 少佐の言葉に象徴されるように、米国を始め世界は、現実の政策として、力のバランスによる平和維持を当然のこと

として、経済的重圧に耐えつつも鋭意努力しています。我が国といえどもその枠から抜け出すことができず、平和憲法を維持しつつも、その一翼をになっ
ているのが実情です。つまり、非現実的な非武装中立主義、無抵抗、無暴力主義
を排して集団安全保障政策を国是とし、自衛隊は正にその力の政策の一環とし
て存在しています。しかも近時それは、私達の願いにもかかわらず、米国を始め
同盟諸国の要求もあって、逐次増加・拡大の傾向にあると思います。

3. 自衛隊員は、防衛の基本方針に従い、各々のポストにおいて渾身の努力を傾注
するのが当然であり、その間一点の疑問もあってはならないと思います。これ
が軍の本質であり、又士気の根幹にかかわるものと思います。有事の際戦争目
的に疑問を持ちつつ、生命を賭しての戦いに全力を発揮することは困難でしょ
うから。

自衛隊の一般方針と私達の信仰との相剋・矛盾はあってほしくないし、将来
万一にも想定される戦いは真に「聖なる戦い」であってほしい。その願いが不
幸にもいれられない時、志賀兄が心配しておられる「風潮」が生じ、キリスト
者自衛官の心の痛みが生れます。

4. 遠藤周作氏の小説「女の一生」（2部）に、海軍予備学生となったクリスチ
ャンの主人公が、大東亜戦争を「聖戦」と認識できず信仰と戦争参加の矛盾に
悩む。教会の神父、他教会の牧師に救いを求めるが確答が得られず（戦時下の
多くの教会はこの問題については避けざるを得なかった）結局「殺すな」との
聖書の教えについて「殺したものは、自らも死をもって罪をつぐなうべきであ
る」ということに思いを定めて、特攻として戦死する場面があります。ノンクリス
チャンでしたが、同じく特攻隊に所属しつつも、別の使命観をもって、自らの
任務に何らの疑問も持たなかった当時の自分と対比して、感慨なきを得ません。
5. 殉職自衛官合祀裁判を例にとって見ますと、この事件は殉職隊員の顕彰（士
気高揚のための当然の処置）が、旧軍の伝統を受継いだ護国神社合祀という極
めて日本的方法で行われ、しかもクリスチャンである未亡人の承諾を得られな
かった（本人の親兄弟は同意）ことに端を発したのですが、未亡人の所属教
会の牧師及び日本キリスト教団等が、革新団体と共にこれを支援して、隊友会

地連(国)を相手として争ったものといえましょう。裁判の判決は御承知のような内容でしたが、結果として、この事件の自衛隊関係者は、教会及び教団等を反自衛隊団体と目して攻撃すらしています。(57.6.15. 隊友)

靖国神社、各地方の護国神社、忠魂碑等の問題は直接業務に関連のある方もあると思います。

このような自分の所属する(又はかつて所属した)自衛隊と教会・教団との相剋・矛盾は、例え一部のものであっても、私達に深い心の痛みを与えずにはおきません。

矢田部兄は、「キリスト者自衛官は、二つの山—宗教を避けようとする社会と自衛隊を避けようとする教会—の深い谷間に居る」と述べておられますが、更にもう一つの山—教会を反自衛隊団体と目しかねない自衛隊—との「三つの山の谷間」と考えるのは思い過ごしでしょうか。

6. 自衛官を去って6年—市民として「もはや戦いのことは学ばない」(イザヤ2:4)状態ですが、一般社会においても信仰と相容れない仕事は数限りなくあり、むしろ毎日がそれとの斗いであるといえましょう。現職時代に抱いていた疑問と、最近自衛隊を取巻く環境から所見を述べて見ました。恐くこれは私の信仰が至らないためで、多くの会員は自分なりの信念を堅持しておられると思います。万一私と同様な痛みを持っている方があれば、コルネリオ会は、それらの内なる問題について痛みを分かち合い、解決し合って行くのも、会の目的の一つではないかと思い、あえて拙文を試みた次第です。

✿ 82年 OCF/コルネリオ会合同集會に参加して

小山田光成(空1尉・航空資料作業隊)

10月23日(土)に横田基地のベース・チャペルで、日米のクリスチャン合同集會があることを滝原兄から紹介された。初めてなので興味と期待を抱きながら参加させていただいた。特に、私は前夜から基地内のクリスチャン家庭に泊めてもらうことにした。22日の夕方6時頃、福生駅に着いて泊る予定の家へ電話をしたら、車で迎えに来てくれた。御夫妻の名前はホアン・マルチネス(Juan Martinez)

とイルマ（Irma）さんで、お互いに自己紹介した。二人共テキサス州出身でメキシコ系米国人であった。小さい時からカトリック教会に行っていたが、3年前に日本に来てからは、プロテスタントの教会に行き、個人的に信仰を強められたそうである。その教会は「カルバリー保守バプテスト教会」という名前で、基地から4 km程離れたところにあった。私を乗せた車はその教会に着いた。10人程の米国人教会員が歓迎してくれた。各家庭から料理を持ち寄る「ポットラック・パーティー」（potluck）に招かれたのであった。かつて私は三沢基地にいた時も、このようなパーティーに招かれたことがあったので大変懐しく感じた。食事をしながら話し合った。勿論全部英語だった。分からないこともあったが楽しい交りの中にも聖書を学ぶことができた。罪とは何か、どうしたら赦されるのかなど熱心に話し合われた。この教会のアルバムを見せてもらったら、ミーク中佐もこの保守バプテスト教会系に属していることが分かった。

マルチネスさんの住居は基地内の東部地区にあった。2階建ての長屋だが、広々とした部屋であった。隣家に預けていた二人の女の子と会う。9才のクラウディア（Claudia）と5才のシーラ（Cira）で美人の奥さんに似た可愛い子供だった。家族のアルバムをひろげながら楽しい思い出をきいたり、自分のことを話し合った。

23日（土）は合同集会である。マルチネスさんの車で西部地区のベース・チャペルへ向う。ランウェイを横断する時、丁度巨大なC-5輸送機が離陸していった。西のベース・チャペルには我々が最初に着き、集会場をセットしながら待った。合同集会は10時ごろにミーク中佐の司会で自己紹介から始まった。日米はそれぞれ日本語と英語で話したが、堀内2陸佐の巧みな通訳で進められた。参加者は50名位だったろうか、時間の経過するのも忘れ、昼食や証しなどが続いた。米人家族の中には日本へ来るのがいやだったが、来てみて良かったとか、神の祝福があったと言って喜んでいる人が多かった。つたない私の証しが終わってから、横田基地内見学をした。基地破壊消防隊では施設器材の説明を受け、巨大散水車のデモまでしていただいた。そして駐機中のC-130、C-141の機内見学もすることができた。

夕食は基地内レストラン「ハシエンダ」(Hacienda)でメキシコ料理をいただき、そこで散会となった。「ホテル・ニューオオタニ」のガーデン・チャペルで牧会をしている Maddox 御夫妻と知り合うことが出来、その後、毎週火曜日午後6時半からタワー・ビル8階2813号室の自宅で行われている Bible class に参加させていただくようになった。

私はマルチネスさんの御厚意に甘えて、土曜日の夜も泊めていただいた。彼は私と同様に長距離ランナーの一人で、翌日の日曜日は、基地の「ストライダース」クラブの一員として、芦ノ湖周辺のマラソン大会(20km走)に参加すると言っていた。早朝に家を出るというので夜のうちに、お互いに挨拶をし、彼の健闘を祈った。

24日(日)は、奥さんと子供2人私の4人で家の近くの東部地区ベース・チャペル(「イースト・チャペル」)へ行った。奥さんはサンデースクールの教師をしており、私も見学させてもらった。10時半からプロテスタントの礼拝が行われ出席した。昨日の合同集会に参加した方々にも多数再会した。このチャプレン(珍しく女性で空軍大尉)からメッセージをきいた。更に、黒人を主としたゴスペル・コワイヤーが力強く手拍子を取りながら賛美し、すばらしく活気あふれた礼拝を体験した。長身で美人のチャプレンから「新来会者はいませんか」という呼びかけがあり、挙手すると、私ともう一人の黒人女性だけだった。私はドキドキしながら英語で自己紹介したら、チャプレンや多くの教会員から握手を求められ、全く感謝感激のひとつときであった。また来てくれと言われながら、帰宅した。

私にとってこの3日間は、主イエス・キリストの下にある人々の信仰生活の中に浸る素晴らしい日々であった。私自身ふり返ってみると、東京勤務になってから8年が過ぎた。それは安易な家庭生活と通勤・職場における多忙な日々の明け暮れであったようだ。聖書を読むことや教会からも遠ざかっていた。今回の横田基地での体験は、空白を一挙に埋めてくれたようだった。眠りから覚めたと言ってもいいだろう。1週間後、目黒の「St. Amserm's Chasolic Church」で「イースト・チャペル」のゴスペル・コワイヤーによる黒人霊歌コンサートが行われた。マルチネス氏からその招待券をいただいていたので喜んで行き、再びあ

の感激の賛美をきいた。教会員もバス 2 台で来ており、再会できた。

私は、信仰生活が弱く細くなっていることに気づかされ、なんとしても生活の一部にしようと思い、聖書を読むことから始め、教会や集会にも行くことにした。先の「カルバリ保守バプテスト教会」から紹介された「津田沼保守バプテスト教会」は私の家から近いところにあつたので早速行った。丁度特伝をやっており、信仰を強められ、交りを持つことができた。

ミーコ中佐のお父さんが、えそという病気のため片足を切断しなければならなくなったという悲しいニュースを津田沼教会で知らされた。速やかな回復を会員と共に祈った。

同僚の馬谷兄の紹介で、毎週金曜日午後 6 時から「お茶の水学生キリスト教会館」で行われている一般信徒対象の“Friday Night”という賛美とメッセージの夕べにも参加するようになった。馬谷兄には Maddox 師宅での Bible Class を紹介したら、喜んで参加してくれた。コルネリオ会の先輩である足立兄も来ておられ、励まされています。(57. 11. 28 記)

「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と
慎みとの霊です」(テモテ II 1:7)

✿ コルネリオ会集会報告

1. 役員会

日時 1982年9月17日(金) 1830~2030

場所 東京下落合 新屋徳治師宅

決定事項

- (1) 月例会開催について
- (2) 日米合同集会について
- (3) 祈り

参会者 滝口、滝原、堀内、志賀、今井の各兄

2. 月例会、役員会 1830~2030

日時 1982年10月8日(金)

場所 東京下落合 新屋徳治師宅

実施事項

- (1) 聖書研究
- (2) 日米合同集会打合せ
- (3) 会員の連絡について
- (4) 祈り

参加者 清水、藤原、下桑谷、滝口、滝原、堀内、海野、小山田、今井の各兄

3. 日米合同修養会(日本OCUと米国OCF)

日時 1982年10月23日(土)

場所 米空軍横田基地

時間	行事	場所
900~1000	受付と交歓	チャペル
1000~1200	自己紹介	〃



横田米軍基地での日米合同修養会

1200～1300	昼食	チャペル
1300～1500	あかし会(米3名、日本3名)	〃
1500～1700	基地内見学	基地内
1700～1830	晩さん会	レストランHacienda
1830～1930	お別れ交歓	〃

出席者

日本側 今井教授、夫人、足立元海将補、矢田部1陸佐、藤田2空佐、夫人、堀内2陸佐、中野2空佐、滝口2空佐、夫人、滝原3空佐、夫人、武宮元3空佐、小山田1空尉、坂本2陸曹

米軍側 Meeko 空軍中佐他31名

なお、米軍 OCF より修養会の前日夜および当日夜基地会員の家に宿泊歓迎の申出があり、中野2空佐および小山田1空尉は宿泊して米軍メンバーと更に深い交歓が出来た事は祝福であった。

4. 月例会・役員会

日時 1982年11月12日(金) 1830～2030

場所 東京下落合 新屋徳治師宅

実施事項

- (1) 聖書研究
- (2) 日米合同修養会の報告
- (3) 祈り

参会者 足立、清水、滝口、堀内、下桑谷、今井の諸兄

5. 月例会・役員会

日時 1982年12月10日(金) 1830～2030

場所 東京下落合 新屋徳治師宅

実施事項

- (1) 聖書研究

(2) 祈り

参会者 清水、滝口、堀内、小山田、下桑谷、今井の諸兄



新屋師宅に於ける東京月例会

6. 月例会・役員会

日時 1983年1月14日(金) 1830~2030

場所 東京下落合 新屋徳治師宅

実施事項

- (1) 聖書研究
- (2) AMCFアジア大会(台北)について打合せ
- (3) 次回アジア大会の日本開催についての打合せ
- (4) 祈り

参会者 清水、滝口、滝原、下桑谷、矢田部、今井の諸兄

7. 臨時役員会

日時 1983年1月15日(土) 1000~1200

場所 東京 市ヶ谷会館

打合せ検討事項

A M C F 次回アジア大会開催について

- (1) 開催場所について
- (2) 講師について
- (3) 費用について
- (4) 会員の奉仕態勢について
- (5) 日本開催の可能性について
- (6) 祈り

出席者 矢田部、滝口、下桑谷、今井の各兄

● 「利岡中和遺稿集」(760頁、昭47.12)のおすすめ

矢田部稔(富校)

昨8月に御殿場教会の一日修養会で3人のレポーターの1人として自衛隊伝道のことを話したことは35号で報告しましたが、そのときのもう1人の報告者の夫人が利岡先生娘金子百子様と女学校の同級生とのことで、「遺稿集」を貸して下さった。小生は途中まで読んで自分のためのものを注文しました。

また昨12月駒門駐屯地近くにお住いの林富美子先生(救ライ医療に挺身、駒門駐嘱託医師、現「御殿場十字の園老人ホーム」医師)を訪問し、御近著「野に咲くペロニカ」の中に利岡中和先生のごことが記されていることについてお聞きすると、義父(故林文雄氏の父)林竹治郎画伯と利岡先生は知己であったこと、有名な「朝の祈り」の画が利岡邸にあることなどを聞き、去る1月8日、車で2時間ぐらいの距離にある茅ヶ崎市の利岡先生御遺族を訪問しました。

防大学生の頃、千葉愛爾先生から利岡先生に一度お会いするようすすめられていました。が実現しないままでした。

「遺稿集」を読んで、昔の土佐の様子(小生も土佐出身)、経理将校として軍職にあるときも34才頃退役し汁粉屋を営みつつ軍人伝道を志し「コルネリオ通信」を発刊したときもいちずに生き続けた信仰者の姿、自衛隊のコルネリ

オ会が発足したときの思い等を知りあらためて励ましを受けました。

御一読をおすすめします。代金については御遺族は伝道のためのものでありお志しのままとのことでしたが、小生は2,000円(送料含む)くらいが適当と思います。〒253 茅ヶ崎市東海岸北3-14-19 金子百子^{おとこ}あて

● 通 信

○ インマヌエル総合伝道団静岡インマヌエル教会の松村導男牧師から新年のご祝詞と共にご一家の写真および教団、教会の紹介が届きました。先生は本年75才で奥様さだ子牧師と共に静岡インマヌエル教会の主牧師を勤めておられます。長男献一牧師は聖宣神学校教授、東関東教区長を兼ねて奥様めぐみ牧師と共に千葉インマヌエル教会を牧しておられます(子供2人)、次男伊作牧師は奥様千恵子牧師と共に甲府インマヌエル教会を開拓牧会、三男義矢牧師は奥様宣恵牧師と共に静岡インマヌエル教会の副牧師(子供2人)、長女導子姉は中学教諭に嫁し(子供2人)、次女宣子姉は新聞社次長に嫁し(子供3人)、三女ルツ子姉は夫と共に保育園を運営(子供3人)という祝福されたご家族との事です。

先生は昭和13年中国に渡り上海に教会を建てて伝道に励まれました。当時の陸軍憲兵曹長北兄はその教会で救われ現在も内地に於て活躍しておられる由。終戦後は混乱の戦地に於て立派なあかしをされた後帰国、インマヌエル教団に属して海外宣教団の世話を全く受けることなしに牧師227名信徒伝道者11名が全員日本人で会員1,261名のインマヌエル総合伝道団の重鎮として活躍しておられます。元海軍大佐長谷川稔氏は静岡教会の信徒伝道者であり、現会員には陸上自衛隊北千歳駐とん地の勝山昌之兄や防衛医科大学附属の看護学院を卒業されて静岡の病院におられる中山ゆみ姉がおられます。

先生には常にコルネリオ会をおぼえて祈りの中に入れて頂いており、いつも教会の週報等を送って頂いて感謝しています。誌上をかりて厚くお礼申し上げますと共に将来共コルネリオ会の為に祈りを続けて頂き度くお願い申し上げます。先生のご一家の上に、また伝道の上にそして先生のご健康のためにお祈り申し上げます。

○ 山田伊智郎兄（大村駐とん地 防大26期）

「主の御名を讃美致します。朝晩は肌寒さを感じる頃となりましたがいかがお過ごしでしょうか。私は幹校を卒業し第四施設大隊第一中隊に配置になりました。未熟者ですが全力で努力する所存ですのでよろしく御指導お願い申し上げます。ところで先日資料等送っていただき返事も出さずに失礼いたしました。今後コルネリオ会の活動に微力ながら参加して行きたいと思っておりますのでよろしく御指導をお願い申し上げます」

コルネリオ会事務局（JOCU）

横須賀市志水1丁目

防衛大学校応物教室

今井教授気付

振替 東京 3-87577

（発行責任者 今井健次）